

# 柳原吉兵衛の支援活動

—朝鮮人女子教員内地学事視察を中心に—

The Supporting Activities of *Kichibei Yanagihara*:  
Focusing on the Educational Inspection Opportunities for the Korean Female  
Teachers to visit the Main Islands of Japan

太田孝子

要旨：

柳原吉兵衛（1858～1945）は朝鮮人のために多くの支援活動を展開したが、3回にわたって朝鮮人女子教員を内地（日本）に招く「学事視察」を実施した。朝鮮各道から選ばれた女子教員たちは各地の小学校や新聞社、名所旧跡を訪ねて様々な体験をしたが、柳原が実施した内地学事視察には、①昭和天皇即位式関連諸行事への拝観、②李王家並びに総督府関係者宅への訪問、③皇室や朝鮮王室の関係者等との面談、など朝鮮総督府が主催した学事視察とは著しく異なる点が見られる。

柳原が営む大和川染工所が完成させたカーキ色の軍服地が献上品御嘉納となったこと、セルロイド人形が宮内省お買い上げとなったことなどを通して皇室への尊崇の念を深めた柳原の意向が、内地学事視察の目的や見学場所にも反映されたためである。「文化の発達した内地」を見学させ、皇室や朝鮮王室の人々と会うことが、植民地朝鮮の教員に利すると考えた結果であるが、柳原は優秀で高い技術を持つ多くの女子教員と接しながら、最後まで朝鮮の文化への関心を表明することはなかった。本稿では、柳原が招待した女子教員内地学事視察の全体像を把握・検討するとともに、視察の背後に内包された動機・意図を考察した。

はじめに

柳原吉兵衛は、大和川染工所の経営によって得た資産のほとんどを朝鮮人に対する支援活動に費やした。柳原の行った支援活動は、①朝鮮人個人に対する支援、②内鮮協和会を通しての各種支援、③李王家御慶事記念会を通しての女学生・女子教員に対する支援、の三つに大別できる。②は大阪府内鮮協和会の組織・運営による支援であり、③は朝鮮の高等女学校・女子高等普通学校の最優秀卒業生の表彰、内地に留学した女学生の支援、朝鮮人女子教員の内地学事視察の実施、が主なものである<sup>1</sup>。①は②③から派生した人々をも含み、その数は計り知れない。筆者は、高等女学校研究会に所属して③を調査・研究対象としてきたが、柳原自身も生涯の中で最も多くの努力を重ね、支援したのは③であった<sup>2</sup>と述べている。

柳原は1920年に「李王家御慶事記念会」を創設して、朝鮮の女子高等普通学校（以下、女高普も使用）等の最優等生を表彰し、記念賞牌（メダル）を与え、一部の卒業生には奈良女子高等師範学校（以下、女高師も使用）を中心とする内地の高等教育機関への留学を仲介した。留学生には奨学金を貸与しただけでなく、渡日前から卒業まで細部にわたる支援を行い、卒業後も書信を交わしている。卒業生の多くは教員になったが、柳原はほぼ毎年朝鮮に渡って親睦会を開き、勤

務校を訪問しては激励し続けた。さらには3回にわたって女子教員に内地学事視察の機会を提供している。御慶事記念会が表彰した女学生は1,048人、世話をした内地留学生は80余人、学事視察に参加した女子教員は57人である。

柳原が行った朝鮮人女子学生への支援活動は、規模・内容などの点で稀有な事例であるだけでなく、留学した女子学生が卒業後教員になり、内地を知らない女子教員のためにリーダーとなって内地学事視察に参画し、その経験を教育の中で発揮させ、さらには教え子の中から留学生を誕生させようとする循環的な形態であった、という点でも注目に値する。

しかし、上記のような支援活動を展開した柳原を、朴宣美は「帝国のさまざまな価値を植民地人に積極的・組織的に伝播し、植え付けようとするコロニアル・ミッショナリーのような存在」<sup>3</sup>だったと評し、樋口雄一はその活動を「朝鮮人としての精神的生命を奪い去る非道の行為」<sup>4</sup>だったと断じている。上記の評価には否定できない面が多々あるが、柳原自身にはその意識がなかったばかりか、内地の諸学校を卒業して帰郷後に柳原に送付した書簡1,202通（送付者57人、桃山学院大学史料室蔵）やその他の残存する資料を読む限り、女子学生・女子教員たちもそのようには受け取っていないことが分かる。

本稿では（1）これまで言及されることのなかった朝鮮人女子教員内地学事視察の全体像を把握・検討すること、（2）柳原自身がどのようなことを考え支援活動を行っていたのか、背景に内包された動機・意図を掌握すること、（3）柳原の活動に対する周囲の人々の評価を把握することが目的であり、柳原が行ってきた支援活動を総合的に捉えるための基礎作業の一部として位置づけるものである。

なお、1）資料のほとんどは旧漢字・旧仮名遣いで書かれているため、そのままの引用を心がけたが、変換できない漢字もあること、2）柳原吉兵衛の姓は戸籍では「柳原」と記されているそうだが（曾孫の柳原高志氏談<sup>5</sup>）、柳原自身による署名・文書、先行研究等では「柳原」が使われているため、本稿でも特別な場合を除き「柳原」に統一したこと、の2点を予めお断りしておきたい。

## 1. 朝鮮人に対する関心の芽生えと公的組織の結成

具足屋の7代目として家督を相続した柳原は、衣類販売業に失敗したことを機に、聖公会聖テモテ教会で洗礼を受け、家業を染色業に変えて再出発を図り、1896（明治29）年、堺市に大和川染工所を創業した。同染工所は大阪紡績株式会社の染工部門として陸軍軍服の加工に関与したことにより日露戦争時には大きな利益を得、さらには日本綿布の海外輸出のための染色・漂白という民需も手伝って、関西地域における代表的な染色工場へと成長を遂げた。

1906（明治39）年5月、紡績業界の私設経済視察団の一員として初めて朝鮮・満州へ渡った柳原は、日本人の朝鮮人に対する無法な振る舞いに衝撃を受け、「内鮮融和」のためには、民間の役割や朝鮮人との接触・交流という方法が必要であるという確信を持つに至る。柳原の自伝には「最初の渡韓の際、在留日本人の反省を促すと同時に“我は一生涯韓人の友人になろう”との堅き決心を固めた」<sup>6</sup>と記されている。韓人の友人となるためには、「一視同仁のキリスト教精神を持って彼らと交際すべきであると信じ、日本へ渡来してくる韓人に愛の手を伸ばす運動をはじめた」<sup>7</sup>のである。この決心は、1910（明治43）年、堺で鉛売りをしていた金相哲<sup>8</sup>を染工所に雇い

入れ、5年間家族の一員として面倒を見、朝鮮に帰国・就職させたことを皮切りに、同染工所の一割を超える朝鮮人労働者の雇用等として実現している。

さらに、柳原の朝鮮人に対する関心は公的な形を取り始める。在朝鮮人問題を大阪地方における最大の社会問題と捉えて「内鮮協和会」を結成（1923年）、方面委員として朝鮮人児童を対象とした夜学会・夜学校の開設、職業紹介、救療援助、御大典にあたっての優良朝鮮人の表彰、映画会による啓蒙活動等を行っている。「教育第一主義」「教育報国」「教壇を通して」が柳原のモットーであり、1925（大正14）年4月、堺市で開催された全国各市小学校聯合会の講演では、在朝鮮人に対する初等教育の普及を訴えている<sup>9</sup>。

他方、柳原は1920（大正9）年4月28日に举行された李王垠と梨本宮方子の結婚を記念して「李王家御慶事記念会」を結成し、会長に就任した。幹事には元田作之進（立教大学初代学長、後日本聖公会の日本人最初の監督主教）、齋藤研一（堺市長）、柳原貞次郎（吉兵衛三男）、松本寛一（堺聖テモテ教会牧師）が就任している。同会は地方の有志を集め、柳原が財源を負担して運営しており、朝鮮にある高等女学校の最優秀卒業生の表彰を主な事業とした。これは、1900（明治33）年に皇太子（大正天皇）の結婚を記念するために、聖公会近畿教区内のミッション・スクール（平安女学院）の優等生を表彰し、賞状・賞牌を授与しようという行事が教区大会で決議され、毎年継続して実施されたという先例からヒントを得ての結成だと言われている<sup>10</sup>。

1922（大正11）年に举行された最初の表彰・賞牌贈与は淑明女高普、進明女高普の2校<sup>11</sup>であるが、翌23（大正12）年には16校20人、24（大正13）年には21校27人、1938（昭和13）年62人、39年67人、40年68人と増え、1942（昭和17）年には計1,048人に達している<sup>12</sup>。次いで、卒業後奈良女高師等に留学した女子学生に奨学金を貸与ようになった他、週末や帰省・帰校の前後、正月、柳原家の行事など機会あるごとに柳原家に招き、社会的人望家や皇室・朝鮮王室との接触の場も提供した。さらに、内地を知らない女子教員のために柳原の企図したものが、本稿で検討する「女子教員内地学事視察」である。

## 2. 女子教員内地学事視察

### 2.1 総督府による視察

本稿が対象とする「女子教員内地学事視察」は、李王家御慶事記念会の招待によって実施されたものであるが、桃山学院大学史料室には『朝鮮総督府主催女教員内地学事視察録（昭和2年度）』が残されており（全41頁）、御慶事記念会主催による視察の前年の記録として興味深い。文中にも、下関観世音寺で「京畿道主催の私立学校男教員内地視察団員十余人と邂逅」<sup>13</sup>との記述がある。高等女学校・女子高等普通学校卒業生に対する聞き取り調査からも、「2週間程度の内地への修学旅行」に関して多くの証言を得ており、内地旅行が頻繁に行われていたことが分かる。昭和2年度の内地視察が何度目のものかは不明だが、李良姫の研究によれば、朝鮮人女子教員を中心とした教育内地観光は1918（大正7）年から実施されているとのことである<sup>14</sup>。李王家御慶事記念会主催による内地学事視察との比較のため、同視察の概要を紹介しておきたい。

朝鮮総督府によって実施された1927（昭和2）年の女教員内地学事視察は、同年10月7日から11月1日までの26日間に及ぶものであり、11道（当時は全13道）から29人の女教員が参加している。小学校8人、普通学校21人、うち1人は女子普通学校<sup>15</sup>勤務であり、参加者名簿より15人が

日本人だと思われる。団長は京城師範学校教諭河野宗一、同小林貞雄である。

総督府に集合した一行は朝鮮神宮に参拝後釜山から出航、福岡（大宰府神社、観音寺、箱崎宮、医科大学、女子師範学校、千代松原など）、広島（厳島神社、広島市内名所、広島高師、同付属小学校、呉軍港）、大阪（湊川神社、造船所、大阪毎日・大阪朝日新聞社、大阪城、造幣局、鐘紡会社、三越呉服店など）、奈良（市民博物館、春日神社、若草山、正倉院、大仏殿、奈良女高師、同付属小学校など）、名古屋（内宮・外宮、徴古館、熱田神宮、名古屋城）、東京（二重橋、明治神宮、靖国神社、東京女高師、同付属小学校、東京音楽学校、東京美術学校、日比谷・上野・浅草公園、図書館、帝展など）、栃木（東照宮、中禅寺湖など）、長野（小学校、製糸工場、善光寺など）、京都（桃山御陵、東西本願寺、小学校、金閣寺、天橋立など）を回り、釜山で解団している。

内地学事視察が企図された目的は「団員相互間は勿論至る所内鮮融和の活模範を実現」することであり、「心を誠にし志を堅くし半島教化のために奮闘すること」<sup>16</sup>、すなわち、視察を通して観たこと・得たことを朝鮮の各学校で実行することであった。

いずれの視察地でも、立派な建物や美しい自然、静謐な神社仏閣に感激し、多くの人々の供応接待に感謝する文章が記されているが、美辞麗句が飛び交う中で、以下が朝鮮との違いに言及した素直な感想である。

東京女高師範学校付属小学校に到り二時間を限り各々自由参観をなす。合科と相互学習の有様は只教室を一巡したるのみにも其の真剣さを窺はれども更に教場に入り詳細を観れば児童は何れも生氣満々として自発的に自己の学習に没頭し本学習法の効果の一般を知ることが得愉快に堪へざるものあり、然れ共経費不十分にして設備完備せず環境を学習に便ならしめ得ざる而も児童の素質に於て優劣の差甚しき吾等の学校にありては直ちに真似すべきものにあらず（後略）<sup>17</sup>。

同付属小学校では、「労作教育、児童自治」で著名な主事北澤種一より、同校の教育方針と女教員の使命についての講話を聴いている。大阪では内鮮協和会主事代理広瀬勝、同会坂本深蔵が応対しているが、柳原に関する言及は皆無である。



写真①朝鮮総督府主催の女子教員内地学事視察（伊勢山田内宮神苑）―「朝鮮総督府主催女子教員内地学事視察録（昭和2年度）」より引用

## 2.2 李王家御慶事記念会主催による視察

### ①第一回「大札奉拝朝鮮女子教員内地視察」

李王家御慶事記念会による一度目の内地視察は、1928（昭和3）年11月19日から12月7日まで19日間に渡って実施され、その様子は『大札奉拝朝鮮女子教員内地視察記』（全69頁、以下、『視察記』）、『向上』<sup>18</sup>第9号（昭和4年1月15日発行）、『青霞翁柳原吉兵衛傳』等に残されている。団長（京城師範学校教諭兼付属普通学校主事鈴木文夫）、幹事（朝鮮総督府学務局編輯書記田島泰秀）引率の下、13全道から20人の団員が参加している。団員全員が朝鮮人であり、うち5人が元留学生で女高普に勤務しているが、他は師範学校（1人）、普通学校（12人）、女子普通学校（2人）の訓導である。柳原（漫画①）も名誉団長として記載されている。『視察記』は団員が順番に記しており、旅程、視察個所とその内容・感想、会った人々（項目名は「特に好意を寄せられた方」）などが詳しく記されている。しかし、後で触れるように、45頁からは幹事田島による「漫画女教員視察団」が載っており、第二部とも言うべき構成になっている。内容も宿舎や車中、見学先での失態や驚き、団員の素朴な疑問・逸話等を扱っており、各項目に象徴的な一枚の絵（漫画）が付いていて前半とは全く趣の違う記録となっている。



漫画① 柳原吉兵衛

柳原が本視察を企図した目的は『視察記』の表題からも推察できるように、「未曾有の御大典（昭和の即位式）に女子教員を招待すること」であった。出発に先立ち、団長の鈴木主事は以下のように述べている。

柳原氏は今回の御大典を機会に、主として未だ内地見学の経験なき皆様朝鮮女子教育家を招待し、御大典の鹵簿や御盛儀の御跡、大禮後の觀兵式などを拝觀し、皇室と国民の父子間関係及び進みゆく内地の文化を詳さに觀察し、體驗して貰ふ事は直接教育の任にある皆様にとり、思想界の現状と内鮮関係の複雑し行く今日の場合に鑑み、誠に意義深い事であらうと云ふお考へから、此の春、突然京城師範學校校長赤城先生の處に依頼状を寄こされたのである。そこで赤城先生は淑明の學監淵澤先生と御相談の結果、中等學校の人選をお引受になり、他は總督府の朝鮮教育會に人選方をお願いせられ、愈々今日の様な團體が出来たのである<sup>19</sup>。

総督府による視察と同様に朝鮮神宮参拝後、釜山を經由して下関に着いた一行は厳島を参拝し、小学校で綴り方の研究授業を参観、大阪に移動して小学校や新聞社等を見学後、李王家御慶事記念会による盛大な歓迎会に出席した（11月24日、写真②）。染工所青霞會館講堂で行われた歓迎会の会衆は400余人、大阪府知事、堺市長、堺市教育会長他から祝辞を受けた。余興では浜寺小学校有志児童、鳥田児童舞踏研究会、柳原の孫の清子等による合唱、独唱、舞踏など20種目以上が披露さ



写真② 李王家御慶事記念会による歓迎会

れた。女教員たちには菓子、記念徽章、旅行用洗面用具・裁縫道具等たくさんのお土産が用意され、大歓迎を受けた。

続いて第一の目的である「鹵簿奉拝」のため前日から京都入りしていた一行は、26日早朝4時半に京都御苑に集合、13区に莫蔭を敷いて9時45分の奉拝を待った。席を確保(写真③)するために柳原は前年より準備をしており<sup>20</sup>、それに対する感謝の気持ちは「幾十万の奉拝者が夜を通して沿道に露と霜に打たれてお待ち申して居るのに比べると、有難い事である。もったいない事である」<sup>21</sup>と記されている。鹵簿奉拝に関しては、入場券の写し、写真等も含め4頁を割いているが、ハイライトは以下のとおりである。



写真③ 鹵簿奉拝のための座席票と女子教員

祝意天地に満る国民奉拝のうちを御羽車を押し鳳輦は肅々と進御あらせ給ひ・・・仰ぎ奉れば、陛下には一々両側に居並ぶ赤子を嚮せられつゝ、舉手の禮を賜ふ御さまの、餘りに畏しとも長く感激の涙頬に傳ふ赤子の姿を彼處此處に見られたのは感激的な美しいシーンであった。私共一行は金光燦たる歴史的鹵簿を押し、国民的情景に十分ひたり、感激を語りながら、御所内を出た<sup>22</sup>。

次いで、奈良女高師に向い留学生たちと懇談、翌朝から奈良(奈良公園、大仏殿、春日大社、若草山など)、伊勢神宮などを巡り、11月29日には東京に着いた。宮城を参拝後、社会局、東京日日新聞社を見学し、前朝鮮総督齋藤実宅を訪問した<sup>23</sup>。翌30日は上野公園、明治神宮、靖国神社、三越等を巡り、12月1日は新宿御苑拝観後自由学園を訪問、学園長羽仁もと子の接待を受け、全生徒250人と共に当番が作った昼食を味わっている。

12月2日は早朝から昭和一回限りの大礼後の最初の盛大な観兵式に参列し、次いで李王邸を訪問、李王・李王妃に拝謁した。この二つの行事が、本視察第二の目的であり、感極まり感激に打たれた様子が3頁に渡って綴られている。

全国各地より集った光榮ある三萬五千の兵士が整列し、天皇陛下の御臨御遊ばされるを今か今かとお待ち申し上げてゐた。此の壯大な観兵式の陪観者十数万實に御大禮後最初の盛大な儀式である。午前八時四十分、儀仗兵を先頭に、天皇旗をひらめかしつつ御鹵簿は肅々と中央の玉座へとお進みになった。この時おこる君が代の吹奏。三萬五千の将卒動かんともせず・・・恐れ多くも天皇陛下には、御愛馬に召させられ、親しく軍容を閲はせられる。空中では分列式が開始され、百五十三機、翼を列ねて玉座の御前を爆音勇ましく進み・・・陸上では軍楽隊が新作の御大典奉祝の行進曲を奏して進み・・・李王陛下御指揮の御姿も、すぐ目の前に勇ましく拝されて御懐かしく感じた<sup>24</sup>。

午後二時李王殿下の御邸に参上する。心しづめて別室に行き、整列して居ると、襖がゆるゆると両方に開かれた。兩殿下の御平和であり、且つ御優しき御顔を近く拝し得た時は、感極まって胸がどきどきするばかりであった<sup>25</sup>。

京都に戻った一行は、12月4日には即位式の行われた紫宸殿や大嘗宮を押し、「国家最高の御

儀のあとをつぶさに拝し<sup>26</sup>、市教育会女子委員との茶話会、都踊りの見物を終えて帰途に就いた。柳原は大阪、奈良、東京、京都に同行し、団員と共に「国家最高の御儀」に参加したのである。

上述してきたように、小学校や新聞社等の見学もし、留学生や女子教員等との懇談も行ったが、この視察は、大礼を奉拝することこそが目的だったのである。柳原は「千載一遇とも申すべき御日出度い御大禮を機會に、建禮門前の鹵簿奉拝、代々木ヶ原の大觀兵式の拝觀、李王同妃兩殿下への拝謁、京都御所御大禮あとの拝觀等」<sup>27</sup>をさせたかったのであり、「願っても叶はない身に余る光榮の数々に浴しました」「教へ子の前に修身のお話をする自信と新しい力を得たやうな氣がして嬉しくてなりません」<sup>28</sup>等の感想に満足したに相違ない。

しかし、前半とは異なり、後半の「漫画女教員視察団」からは、一行が常に緊張し全神経を注いで御大礼に参加していたのではないことが伝わってくる。鹵簿を待つ間、見知らぬ隣人から菓子やキャラメルが配られ（漫画②）、見学先での聞き取りにくい説明にも「分かった様な顔をしなければ失禮に当たる」<sup>29</sup>から頷いていただけとうそぶく等、異文化の中での失態や疑問、体験談が面白おかしく描かれている。後半の漫画と記述がなければ、“窮屈で立派な記録”という印象は拭えなかったと言える。



漫画② 鹵簿奉拝時

※写真、漫画は何れも『大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察記』より引用

## ②第二回「李王家御慶事十周年記念朝鮮女子教員内地視察」

二度目の内地視察は、1930（昭和5）年4月18日から5月7日（全20日間）に実施され、その様子は『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』（全50頁、以下『御慶事視察記』）、『向上』第22号（昭和5年7月20日刊）、『青霞翁柳原吉兵衛傳』等に残されている。団員が順番に記述するという方法や項目は前回と同じである。団員は出発際に2人の不参加があったため18人（女子高等普通学校教員3人、普通学校訓導15人）で、前年秋の柳原の依頼により京城府（7人）、11道（11人）から選出された朝鮮の人たちである。団長（朝鮮総督府視学官玄樞）、幹事（京城師範学校教諭砂田孝次郎）が引率し、柳原は今回も名誉団長として東京に同行している。

本視察の目的の第一は「李王家御成婚十周年記念奉祝と先般竣工された御新邸のお喜びを申し上げること」<sup>30</sup>であり、前回参加の訓導崔承愛が勤労教育を実施して予想外の実績を上げるなど、教育界に及ぼした効果が多大であったことに励まされて<sup>31</sup>企図したと記されている。

総督府に集合後、前参加の田島泰秀や京城在住女子教員から「有益な面白いお話を承った」<sup>32</sup>ことが二度目の利点である。厳島、大阪、奈良、東京、京都と視察ルートは前回とほぼ同じだが、1）歌舞伎を観劇したこと、2）李王家新邸並びに関屋宮内次官宅を訪問したこと、3）地下鉄、地下売店、高架鉄道、デパート見学等に関する素朴な感想が多数綴られていること、4）観兵式拝観が雨で中止になったこと、5）帝国議會（衆議院・貴族院）を参観したこと、6）教育現場の視察や女子教員との懇談が増えたことが主な特徴であり、前回との相違点ともなっている。概要・感想等は以下のとおりである。

東京に着いた一行は宮城遙拝を終え、夜は柳原夫妻と共に歌舞伎を観劇した（4月27日）。朝

鮮政務総監児玉秀雄の招待によるものであり、幕間には児玉から茶菓の饗応も受けた。「舞臺背景の美しさ、それに装置の完全にして轉換のすみやかなことと相俟って俳優たちの洗練された演技に恍惚と我を忘れて居る中に次から次へとプログラムは進んだ」という記述が残っている<sup>33</sup>。翌日は容儀を整えて李王邸を訪問（写真④）したが、李王夫妻に接見した時の感想が、既述した一度目の訪問時とほぼ同じ文章であり、この点には驚きを禁じえなかった。皇室や日本精神等に関する感想は学校等で教え込まれた語彙の範囲を超えられないということなのであろうか。



影相士組合に撮影依頼された李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記より

写真④ 李王家新邸訪問写真

※写真は『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』より引用

続いて宮内次官関屋貞三郎宅を訪問、朝鮮を知っている夫妻から熱の籠った話が聞けたようで、「此一日は感激と感謝に満たされた恵まれた一日であった」<sup>34</sup>という言葉で長い一日を結んでいる。しかし、天長節（29日）の観兵式拝観は雨で中止となったため、代わりに明治大帝聖徳記念絵画館を見学し、明治神宮、靖国神社等を参拝した。続いて訪れた三越での感想は生き生きとしたものであり、それは大都市東京の感想にも表れている。

最も近代的な設備の整った文化館とも云ふべき三越へと足を運んだ。さすがは日本一のデパートであるこの三越！文明の利器はかくも偉大なものであらうとは・・・稱賛に言葉なく、驚異の目で凡てを見つむるばかりであった。食堂で晝食を済ませ、買い物をし、午後五時に宿に歸った。一日の疲れは宿に於ける友達の感想談と懇談に依って癒されるものではあるまいか！？<sup>35</sup>。

さすが東洋第一の都、否世界三大強國の一たる日本の首都だけあって秩序整然たるアスファルトの道路、両側に並ぶ宏壯な建物、なんと形容してよいやら<sup>36</sup>。

上野驛に着き地下賣店を見た。地下道の両側に地上の如き店が並んで居るのである。そして地上にも省線電車は高架鐵道になって居る。・・・なんと便利なそして進歩した安全な東京ではありませんか<sup>37</sup>。

帝国議會参観の感想は以下のとおりである。

吾等女の身として議會を傍聽し得られたことは實に光榮の至りであった。・・・整然たる



會場の有様誠に壯觀を呈して居た。かくて政友會代議士の猛烈なる質問演説また民政黨側より妨害反對する氣勢！本當に傍聽する我等一同の心を引きつけ緊張の氣分を漂はした。嚴肅なる議會の秩序熱烈な政治家の雄辯は何千哩も離れた處よりはるばると来た私共一同の永遠のインスピレーションになった<sup>38</sup>。

本視察の最も大きな特徴は、教育現場の視察や女教員との懇談が増加したことである。内地到着以来、大阪市教育会視察、同女子部部員との懇談、大阪府立大手前高等女学校、堺市高等女学校、堺市殿馬尋常小学校、大阪市渥美小学校、京都皆山尋常小学校、本能小学校視察、奈良女高師留学生との懇談、同付属小学校、東京音楽学校、東京女高師付属小学校視察、同付属北沢種一主事の講話、京都教育会、京都市女教員会視察、同女教員との懇談、の順で実施された。主な感想は以下のとおりであり、生産・勤労教育、礼儀作法、教授法に深い関心を示していることが分かる。

殿馬小学校教師と生徒の勤勞即ち汗の結晶で出来上がった所の學習園へ導かれた。可成廣いものでここに植ゑられてある總べての植物は當校生徒の栽培によることは勿論築山あり、泉水あり、動物飼養せるあり、特に簡易運動器具等の設備もあったのが一同の目を引いた。丁度見學中五學年の兒童が油菜園に来て教師の指導の下に嬉々として實物につき觀察研究して居る様子竝に一年生がきれいに咲いて居る花壇の間で遊戯して居る可愛らしさ、また處々にて實物又は風景を寫生せるもあり、日常の學習に大いに利用されて居る實状を見て有益に感じ又多大の参考となった<sup>39</sup>。

本能小学校四女の裁縫教授に於ける教師の巧妙にして熟練せる手なみと兒童の活動と相呼応せる學習振り、六男の手工に於ける夫々箱の製作に夢中なる仕事ぶり、三女の唱歌學習に於いては設備の完備と共に指導者の楽器に堪能にして兒童の取扱の巧みな餘裕ある教授振り等技能科の指導法は多大な参考になった<sup>40</sup>。

生産教育及生活指導は大いに其の主義を汲み得る様に努力しなければならぬ。兒童の禮儀作法の範を採り又學校職員として來客に對する親切なる接待振り大いに私の學校に私の身に以て實行すべきものと感ず<sup>41</sup>。

しかし、前視察時と同様に、以下の感想が正直な気持ちを表わしていると言える。

小學校教育が生活指導生産教育と密接なる結びを示したるは、之れ朝鮮教育に身を投じて居るものは大いに範とするの価値ある。豊富な設備は朝鮮の學校に直ちに其の儘採用することのできない点もある<sup>42</sup>。

また、時代に即応した感想もある。

設備完全なるは云ふまでもなく、・・皇室尊崇の念を養ふ爲、屋上に遥拝場を設け月の十五日には全校生徒を集合せしめて遥拝を行ふこと又長者を尊敬し相互扶助の精神を養ふてゐるとのこと。これが国民精神を養ふ理想的施設ではあるまいか、朝鮮にはいまだかゝる設備なきを残念に思い<sup>43</sup>・・・。

學校の視察が増加した背景に、前参加者の意見があつたのかどうかは定かではない。団員たちの文章が生き生きするのは、上述のとおり、異文化に對した時の驚きや感嘆であり、學校教員として馴染みのある教育現場での感想である。

### ③第三回「朝鮮女子教員内地視察」

三度目の内地視察（以下、「第三回視察」）は1934（昭和9）年4月20日～5月7日（18日間）に実施された。後日報告書が刊行されたようだが、入手できていない<sup>44</sup>。『櫻檀の華』第2号（昭和9年4月20日刊）、同第3号（昭和10年4月6日刊）、『青霞翁劉柳原吉兵衛傳』、『文教の朝鮮』106巻6月号（1934年）等に残存する記事から「第三回視察」を把握・検証していきたい。

団長（朝鮮教育会囑託北川清之助）、幹事（京城權華女学校教員金東玉、桜井公立尋常小学校訓導中谷文子）引率<sup>45</sup>の下、13道から選出された18人（女学校教員4人、普通学校訓導14人）が参集した。幹事の金東玉と団員の女学校教員は5人とも奈良女高師の卒業生であり、最優等表彰を受けた者が7人（教員3人、訓導4人）いる。柳原が名誉団長として、東京、奈良に同行した。

視察の目的は、「李王家御慶事記念日（四月二十八日）当日ニ王家東京邸へ一行伺候ノ爲メ及び天長節觀兵式拝觀ノ爲メ且ツ奈良女子高等師範學校創立二十五年記念祝賀式（五月一日）参列」である<sup>46</sup>。奈良姫によると、報告書には「日本の權威を確認させ内鮮融和を進めるとの狙い」と書かれているようである<sup>47</sup>。柳原は「女子教員を内地に迎へるに際して」と題する文章の中で、「親しく御面會の上、育英事業にある方々に微衷をお話し充分に御了解を願って理想に進んで行きたい」と記しており、微衷とは「国民精神作興の門に入る鑰である教育への奮起を期待する気持ち」<sup>48</sup>と読める。前二回にわたって招待した人々が、「帰国後教育事業の第一線に立って御活動であり、學務當局において其の功績を認められて居られる方もあり・・・この催しの決して無駄でなかったこと」<sup>49</sup>を喜び計画したことが分かる。

コースは前二回とほぼ同じだが、京都、宇治山田、東京、奈良、大阪、巖島と逆回りで実施された。一同揃って日光見物（4月27日）を終え、翌28日の李王家御慶事記念日に柳原は金東玉（今視察の幹事で昭和5年に皇太后に献上した人形衣服の謹製者）、崔貴蘭（今視察団員で昭和7年献上の朝鮮金剛山図刺繍の謹製者）を連れて大宮御所を伺候、入江皇后宮大夫に面接している。その後、朝鮮総督も歴任した齋藤実首相の招待により一行と共に官邸を訪問し（写真⑤）、大食堂で茶菓の接待を受けた。団長の北川は、齋藤が一行に「柳原君は名利を離れて内鮮のために尽くして居られるのには常々から私は敬意を表していると語られたのは全くハラボジの大きい徳の輝き」だと記している<sup>50</sup>。次いで李王家東京邸へ伺候、両殿下に拝謁し御成婚第十四回目の祝詞を述べた。29日は天長節恒例の觀兵式に陪觀、柳原は「特別觀覽席に着き燦然と輝く天皇旗を拝し奉る」<sup>51</sup>と綴っている。

奈良女高師開校25周年記念式に参列（5月1日）し、染工所青霞館で歓迎会を開催（3日）、翌4日はバスを借り切って大阪の名所、教育施設等を見学後、大阪知事別館で開かれた内鮮協和会主催の歓迎会に招待された。

団長北川は本視察を下記のようにまとめているが、女教員たちをこれらの諸行事に参列させたかったために、「逆回り」で日程を組んだのである。

伊勢大神宮での御優待、東京にて首相官邸の齋藤首相御夫妻の御懇切なる御歓待、李王家の御引見の光栄、新帝国議事堂の偉觀見学、明治神宮参拝の優遇、奈良女高師の二十五周年



写真⑤ 齋藤実首相邸訪問（『櫻檀の華』第3号、1935年4月6日刊）より引用

記念式参列、堺市青霞会館にて李王家御慶事記念会の盛大なる御歓迎の歓喜、大阪府知事官邸別館の官民多数の御歓迎の盛会等・・・又京都成徳小学校、堀川高等女学校、宇治山田市厚生小学校、奈良斑鳩小学校、堺錦綾小学校、巖島小学校等の参観・・・<sup>52</sup>

上記のまとめに続き、神宮・官邸などを訪問した前半部、各学校を見学した後半部に対する感想が以下のように記されている。

一生涯を通じて記念すべき事で、国家観念に燃え内鮮融和の真諦を体験し真に人類文化の進展に貢献すべき感銘を強くし・・・各校参観には深刻なる精神的陶冶、訓練の徹底など筆舌に到底尽くし得ざる或る力を如実に観取し得たのであります<sup>53</sup>。

「御優待、御歓待、御歓迎」等の文字が頻出するが、その背後には柳原と関係者との多くの遣り取りがあった。北川はその点にも触れている。

朝鮮教育會に入って僅かに一年足らず・・・卓を並べるお隣の方で早くから人選や日程や往復の交渉等準備に手数のかかって居る事を承知していた。わけても日程作成の朝野主事はあれこれと主催者と團員との各々の心持や互の儀礼的行動のとれる様にとか、とても苦心して日程を作成して居られたのであった<sup>54</sup>。

反面、李の論文には次のような団員たちの発言が載っており<sup>55</sup>、日中戦争へと進んでいく時代の潮流を感じる。

内地の児童は幼き時より家庭において父母の慈愛の教育を受け、父母と共に神の教育を受け、成長するにますますの敬う心養われ、神社崇拜の念が培われ、全国民の信仰の心に集中し、之より国民精神は統一され、純化され国家的観念が啓培される。

吾等を守る兵隊さん、教育の完成は立派な兵隊に仕立て上げること。

李良姫は「視察で観察した事柄を朝鮮の地で実行することが求められた。つまり、教育の場における見知の還元である。・・・内鮮融和に即した形で、児童を教育することが求められたのは疑い得ない。とりわけ、教育観光団は・・・植民地政策の一助として利用されたと言えよう」<sup>56</sup>と断じている。しかし、堺での歓迎会の後、柳原は団長に下記のような依頼をしていることを付け加えておきたい。「植民地政策」がもたらしたもののの中には、以下のような交流も存在したのである。

團長さん、今晚一晩だけ娘四人を私に預らしてください。さあ皆、みんなの好きな美味しい澤庵漬を昨年の秋から澤山こしらへて待っている。なんと其の嬉しそうな様は全く孫娘が帰着したように嬉しがって居られる。

此の情愛の発露、人類愛の美しさに傍の私は胸が詰まって唯黙って快諾したのであった<sup>57</sup>。

### 3. 皇室に対し敬意を持つことになった機縁

上述してきた内容からも明らかなように、李王家御慶事記念会主催による三度にわたる内地視察の特徴は、①昭和天皇即位式関連諸行事の拝観、②李王家並びに総督府関係者宅への訪問、③皇室や朝鮮王室の方々及びその関係者等への朝鮮人女子教員の引見、ということであり総督府主催の視察とは著しく異なる点となっている。これは柳原が関与したために実現したことであり、既述のような謁見の場の設定を何よりも柳原自身が望んだのである。柳原は方々に働きかけ、実現に向けて時間と労力を注いでいるが、柳原が皇室に対して敬意を持つようになった機縁に言及

しておきたい。

1903（明治36）年、柳原は大阪で開催された第5回国勸業博覧会にカーキ色軍服地を大和川染工所の製品として出品し受賞した。京都滞在中の天皇は国産軍服のカーキ染色が完成することを日頃から望んでいたため、受賞した品を京都御所に差し出して天覧に供するよう申し付けた。柳原始め染工所の一同は驚喜し、この予期しない光栄は非常な感激となり、皇室をこれまで以上に尊敬する機縁となった。さらに、1914（大正3）年11月、大阪城に駐輦していた天皇に実業方面から種々の生産品の天覧があった中、特に国産カーキ色の軍服地に目を止められ、「献上品御嘉納の上、お買上げの御命に浴するを得・・・大正5年にはシャム国軍服地の染色加工を特約」<sup>58</sup>することとなった。また、1916（大正5）年には、柳原が関与していた堺加工セルロイド株式会社（染工所の合名会社、1921年に閉鎖）が制作したセルロイド人形（大阪府知事が「やまと人形」と命名）が宮内省のお買上げの栄を賜うこととなった。このような出来事が大きな感激・喜びとなり、既述した諸例の後押しもあって1920（大正9）年の「李王家御慶事記念会」結成へとつながっていったのである。

1924（大正13）年11月、皇后が堺市に行啓の際、柳原は奈良女高師在学中の朝鮮人留学生を引率して水族館内で奉迎したが、皇后から会釈があり、さらに大森皇后官大夫から「内鮮事業に、殊に学生の世話は・・・ご満身に思召さる」との言葉を伝えられ甚く感激した。続く12月2日の皇后御陵参拝の折には実業奨励のため宮内事務官を染工所に差遣、柳原には「朝鮮学生の世話をよくせられることを喜ぶ。工場の精神は朝拜<sup>59</sup>から発する」との御言葉と共にお菓子の下賜があり、工員朴は「我らはこの光栄を如何に感謝してよいか知りません<sup>60</sup>」と述べている。染工所全体に、皇室を敬う気持ちが浸透していたことが窺える。さらに翌14年1月、大阪府知事が皇后に拝謁の際、「堺の柳原が朝鮮学生の世話をするは篤志のことなり」との言葉を伝え聞き、感涙にむせんだ<sup>61</sup>と記されている。このように立て続けに直接皇室との関わりを持ったことが、ますます尊崇の念を強くすることにつながったものと思われる。

上記のような体験に感激した柳原は、折につけ多様な品々を皇室に献上している。1920（大正9）年、李王世子垠と梨本宮方子の御成婚が公表されると、柳原はセルロイド加工の化粧道具を謹製して献上し、皇后奉迎の際には奈良女高師留学生謹製の刺繍付きクッション一対を、また別の折には市松人形を献納した、等々である。

実業家、大阪内鮮協和会方面委員、御慶事記念会会長等としての活動が評価され、柳原は何度も観桜会、観菊会に招待されており、1932（昭和7）年には大演習のため大阪に駐輦中の天皇に拝謁御陪食者十人の内の一人に選ばれた。紡績、人造絹糸、ペイント工業、日本の製鉄工業、鑄造鉄管などについて事業功労者9人が5分ずつ言上したが、柳原の言上は20分に及んだ。御下問の第一は綿布加工業について、第二は朝鮮と柳原についてであり、時間が超過した経緯は以下のように綴られている。

吉兵衛は二十分、まさに四人分を費やした。退出すると鳩山文相が時計を示しながら「柳原さん、どんな話をしたか知らんがこれはレコード破りですよ」と言う。「ヂヂとババが朝鮮行の話を申し上げましたところ陛下は聲を立ててお笑い遊ばしつぎつぎに訊かれましてナ、話すことは何ほでもあります」と言ったので並る高官連もどっと笑い興じ<sup>62</sup>・・・。

この日の喜びを「一介の老実業家がこの光栄に浴したことは家門の譽であります。粉骨碎身この天恩に答え奉らんことを期して居ります。・・・いかにすれば天恩の万分の一にも報い奉るこ

とができるかと衷心恐懼している次第であります」と記し、後日、県知事も「陛下は君の話が面白かったと仰せられた」と伝えている<sup>63</sup>。

柳原の衷心恐懼には、皇室・朝鮮王室との直接の面談や諸体験が大きく作用していると思われる。何度にも及ぶ謁見等の直接体験、折にかなった適切な言葉や伝聞を耳にしたことなどが相乗効果をもたらし、柳原はますます皇室への尊崇の念を強くし、柳原自身が企図する支援活動に励んでいったものとする。他方、柳原はキリスト教会でも長老として活躍している。柳原の皇室への尊崇の念は、一神教のキリスト教信仰と矛盾するものではなかったことを付記しておきたい<sup>64</sup>。

#### 4. まとめ—支援活動に対する関係者の評価

上述してきたように柳原は朝鮮人女子留学生や女子教員に対する種々の支援を実施してきたが、周辺にいた関係者はどのように評価していたのだろうか。その点を諸資料の中から探っておきたい。まずは、李王家御慶事記念会結成に対する評価である。

4月28日の吉辰を記念して喜びを共にしようというのが発端であった。しかし名は実を示さねば意味なく名実ともに会の成長と発展を示すに至ったのは、吉兵衛の他意なき熱心がこれを大成なさしめた<sup>65</sup>。

吉兵衛は日韓親善とか内鮮融和の本体は人格の触れ合いが、お互いの親愛感を増すことにあるので、派手なお祭り騒ぎをすることでない信じていた。吉兵衛の最も喜んだことは、成立した御慶事記念会を通じて、韓国の人々と触れ合う場を造り、人間同士が人種を超えて親愛の交りのできる事であった。・・朝鮮八道の女学校の最優等卒業生を表彰したことが縁となり、そうした親愛の場が作られるようになったのである<sup>66</sup>。

いずれも柳原の素朴な願いが発端であり、相互の交流に喜びを見出していたという評価である。一方、支援に対する評価は以下のとおりであり、支援を受けた側からは深い愛情から発したものと捉えた内容が記されている。

今回の催しは本當に人類相愛の泉から湧き出た已むに止まれぬ尊い愛の迸りだと只々感激の外はありませぬ。斯うしたやさしい美しい御事業は慥かに熱烈な宗教的信念に立脚した純粹無垢のものたることを固く信じるものであります。・・・貴殿の恬淡、無邪氣、童顔を以って誰彼の区別なく接せらるる御態度、お気持ち様が特に奥床しく、嬉しくて堪らないのです。かかる温い尊い御心情に親しく接した我らには何か知れぬ深刻なる或る物を印象付けられました<sup>67</sup>。

一視同仁のキリスト教的精神を以って彼らと交際すべきであると信じ、日本へ渡来してくる朝鮮人に愛の手を伸ばす運動を始めた<sup>68</sup>。

さらには皇室や朝鮮王室、それは日本の朝鮮支配を象徴するものであるが、女子留学生や女教員の感想・手紙には、皇室との謁見等には違和感を抱かず、光栄に思うというレベルで捉えられており、拒否や反発などマイナスの評価は見られない<sup>69</sup>。前述した通り、女教員全員が皇室等に対して同一の語彙・語句を使用している点から学校教育の影響力の大きさが分かり、柳原が期待するほどの受け止め方をしていないことが窺える。しかし、1920年代から、朝鮮では抗日学生運動が頻発し、中・高等教育機関の生徒・学生だけでなく、児童や教員にまで拡大していた。内地学事視察は、そのような教育事情の中で実施されていたのであり、総督府学務局は、国民精神涵

養を期待して、柳原の企画を支えていたのである<sup>70</sup>。

柳原は、1926（大正15）年3月には事業を長男に任せ、御慶事記念会の事業を始めとする社会事業に専念するようになった。朝鮮への渡航は計8回であり、柳原が行けないときは三男で御慶事記念会幹事の貞次郎、松本寛一等が代行した。帰朝した元留学生や知人を訪ね、交流することが何よりの喜びであった。それを裏付ける証言は幾つも残っているが、柳原は「乗客の中にはブラリと遊覧気分で出かける人、一儲けてやろうと行く人もあらうが、私たちは・人との和、友情を温めに行くのだ」と言い、貞次郎は「親しい方々と睦む事のできる幸福を感じる。朝鮮に来る父の唯一の楽しみは是」<sup>71</sup>と応じている。以下からは、柳原がこの支援活動を楽しみ、あたかも道楽のように行っていたことが伝わってくる。

実際彼はこの仕事を楽しんでやっていた。かつてある有力な一婦人が吉兵衛の横顔について「柳原さんが韓国の方々のことを語るとき、笑みを含みいかにも楽しそうに親善の働きに打ち込んでいると言う奥床しい人格が伺われました」といっているが実際周知の方々も異口同音に「柳原さんは朝鮮八道の方々と親善融和を恰も道楽に凝る人の如く愉快にやっていた」と言われた。確かにこれが彼の晩年の道楽だったと言ってよい<sup>72</sup>。

しかし、一点気になることがある。8回も訪朝し、多くの朝鮮人女学生・女子教員等と交流を持ちながら、柳原自身による朝鮮の文化に対する言及、関心を窺わせる文章が見当たらないことである。皇室に献上するだけの刺繍や絵画の腕前を評価し、優秀な女学生と記しながら、それを生み出した朝鮮の文化に対する言及を現時点では見つけることができていない。「文化の発達した内地」<sup>73</sup>を良しとし、内地のようになることを願った点に、柳原の異文化への眼差しの欠如が窺え、それが、多くの支援の中にあつた水泡の一つとなったように感じる。もし、朝鮮を内地とは違った文化を持つ国と見ることができたならば、内鮮融和政策や植民地政策をも相対化し、疑義を持つ一助となつていったのではないだろうか。

柳原は1945（昭和20）年3月2日に88歳の生涯を閉じた。2月15日、書類を整理するために土蔵に入り、階段を上ろうとした曲がり角で躓いて倒れた時の後頭部の打撲が致命傷となつた。前年10月には李王夫妻の銀婚の祝いに上京し、傷を負う前日には伊勢大廟に参拝して梨本宮と懇談するなど、最後まで皇室との交流を持ち続けた。柳原の最後に対し、自伝は以下のような感想を記している。

それから間もなく東都の爆撃ますます激しく大宮御所に爆弾が落ちるし、宮城内の炎上なども報じられたが、故人はついにこれらの一切を知らずして天上に召されたのであつた。皇室の罹災を知つたとしたら身もだえしたであろう故人にその悲痛を味わうことなく、いとも平和のうちに「必勝」の信念を守り続け、八十八歳の生涯を全うして天国に凱歌をあげた<sup>74</sup>・・・。

もし、柳原が元気で戦後を迎えていたら、柳原は天皇のいわゆる人間宣言や自身の支援活動をどのように捉え、評価したであろうか。その意見を聴いてみたいというのが率直な感想である。

## 注

- 1 柳原吉兵衛の支援活動に関しては、「植民地下朝鮮の女学生—進明高等女学校を中心に—」でも一部を記述した（『岐阜大学留学生センター紀要2006』所収）。参照されたい。
- 2 「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」（『大和川染工所七十年小史』所収、1966年）、p.140

- 3 朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学』（山川出版社、2005年）、p.83
- 4 樋口雄一『協和会—戦時下朝鮮人統制組織の研究』（社会評論社、1986年）、p.230
- 5 注8で引用した柳原高志編集・発行の『青霞翁柳原吉兵衛傳』では、「柳原」になっている。2014年12月の同氏への聞き取り調査でも表記について言及があった。
- 6 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、p.22
- 7 同上、p.120
- 8 後に、金相哲は伊藤博文暗殺を目的に鉛売りに化けて渡来した諜報者の一人であったことが判明した。堺に流れ込んだ金は染工所が工員見習の志のある朝鮮人を募集していると聞き、時機を窺うまでの身の隠し場所として好都合と考えて働き始めたのだが、金は、日本人に対する憎悪が薄らぐのを恐れ、何度も逃走を繰り返した。しかし、八方探し回っては連れ戻し、叱ることもなく我が子と同様に接する柳原夫妻に次第に心を開くようになる。夜学に通って中等以上の学力を付けた金に、柳原は有力な紹介状を持たせて帰朝させた。金は、水原の拓殖会社に入り、模範的農業監督者となっている（梅田安之『青霞翁柳原吉兵衛傳』1949年刊の私家本を、曾孫の柳原高志が2013年に編集・発行）、pp.50～51
- 9 内鮮協和会発足当時（1923年）、大阪府の朝鮮人夜学校は2校であり、27年に4校設立したものの初等教育の普及は進まなかった。
- 10 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、pp.36～37
- 11 淑明女高普、進明女高普の2校は朝鮮王朝第26代高宗皇帝の側室、嚴妃によって開校した女学校であるため、最初の対象校となった。李王垠と方子妃も同校を度々訪問している。
- 12 柳原の書簡には「毎年表彰者増加セルハ新設学校ニ付テモ卒業者ヲ出ス毎ニ表彰セルコトトセル関係ニ由ル」と記されている（昭和16年11月4日付朝鮮総督府学務局学務課内財団法人李王家御慶事記念会理事長真崎長年宛）。また、「金属類ノ制作ハ時局下ノ事情ニ於テハ殆ンド不可能ニ有之・・・従来ノ通「メタル」ノ贈与ハ困難ト被存候ニ付テハ他ニ適当ノ物ヲ選定スルカ又ハ金属ニ代ルベキ品物即チ代用品ヲ以テ之ニ充ツルカノ方法ヲ今ヨリ考究シ準備ニ着手スルノ必要有之候」（昭和16年11月11日付同上理事原田次郎宛）という書簡も残っており、柳原が細部にわたって配慮し関与していたことが分かる。
- 13 『朝鮮総督府主権女教員内地学事視察録（昭和二年度）』、p.13
- 14 李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」（『北東アジア研究』第13号、2007年刊）、p.158。朝鮮人が日本への観光旅行を組織的に行う際には「内地観光団」という名称で呼ばれることが多く、教員や学生の父兄を中心とした「教育観光団」や修学旅行など様々な形態が存在した。同論文によると、朝鮮人に対する最初の内地観光団は、1909年に『京城日報』が主催して組織・実施したものである（同上、p.157）。他方、日本からの修学旅行は、1896年に行われた兵庫県立豊岡中学校の満州・朝鮮旅行が最初であり、1906年には広島高等師範学校も満州・朝鮮の修学旅行を実施している。1920年代に入るとその数はますます増加し、1920年5月1ヵ月間の国有列車利用団体旅行客21,408人のうち学生の団体客は16,900人と記されている（同上、p.156）。
- 15 普通学校とは朝鮮人児童のための小学校のことである。男子あるいは女子のみの普通学校も存在した。1938年制定の「第3次朝鮮教育令」により、名称が小学校に統一されるまで、「普通学校」が使用された。

- 16 前掲『朝鮮総督府主催女教員内地学事視察録（昭和二年度）』、p.39
- 17 同上、p.28
- 18 柳原は1907年、染工所内に「克己団」という労使扶助団体を結成し、雇用労働者や地域住民に対する慶弔、病気・災害時の共済援助等を実施した。また、「職工講話会」を開催して労働者の健全な職分意識の鼓舞、科学的知識の習得、教養・趣味のある生活の奨励をしただけでなく、リクリエーションの場も提供した。克己団の機関紙が『向上』（1919年7月23日創刊）であり、紙面を通して修養、節約、節制などの価値観を訴えた。李王家御慶事記念会、朝鮮からの女子留学生等に関する記事も当初は『向上』に載せられたが、後に『櫻権の華』（1933年12月25日創刊）を刊行し、関連記事を載せるようになった。
- 19 朝鮮総督府編輯課田島泰秀編『大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察記』（非売品、以下『視察記』）、1929年4月、pp.2～3
- 20 柳原は、元朝鮮総督府学務局長で当時宮内次官だった関屋貞三郎に宛て、御盛儀奉拝・鹵簿拝観等に関し「何日より御所拝観御許し相成候哉御洩し被下度偏に御願申上候」との手紙を出すなど（昭和3年8月16日付）、早くから準備を進めていたことを示す資料が残されている。
- 21 同上『視察記』、p.16
- 22 同上、p.17
- 23 「四時頃五臺の自動車に分乗し、前朝鮮總督齋藤閣下のお宅を訪ふ。奥様、若奥様の御接待によって御馳走になり、おまち申上ぐ。五時頃御帰りになり、温顔に接し得ておなつかしく感じた。今日ここで親しくお目にかかれ、御一家の皆様とお話し出来たのはほんとに嬉しかった」と記されている（同上、p.24）。
- 24 同上、pp.28～29
- 25 同上、p.30
- 26 同上、pp.32～33
- 27 前掲機関紙『向上』第19号（1929年1月15日刊）、p.2
- 28 前掲『視察記』、p.41
- 29 同上、p.51
- 30 玄櫛編集『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』（非売品、以下『御慶事視察記』）1930年7月31日、p.3
- 31 「ただ家の中で座食していることが一つの誇りであるかのように思っていた朝鮮婦人に勤労教育を実施した結果、泥田で働くようになり夫や子どもにまで影響を及ぼし、学校では児童の勤労の一部が正課に加えられるようになった」ことにより、崔承愛は教育界から注目を集めたようである。それを喜び、柳原は1930年夏に崔を大阪に招待し、社会事業（石井記念愛染園、博愛社など）や農事の現場（農事試験場、葡萄組合農園など）を見学させている（『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.138）。
- 32 前掲『御慶事視察記』、p.7
- 33 同上、p.27
- 34 同上、p.29
- 35 同上、p.31
- 36 同上、p.26



- 37 同上、p.29
- 38 同上、pp.31～32
- 39 同上、p.17
- 40 同上、p.23
- 41 同上、p.40
- 42 同上、p.40
- 43 同上、p.20
- 44 前出の李良姫によれば、北川清之助編『朝鮮女教員学事視察報告書』（1934年）が刊行されたようだが、国内の図書館には保存されていない。同編「女教員内地視察團の記」が『文教の朝鮮』106巻6月号（1934年）に載っている（pp.64～83）。
- 45 『櫻権の華』第2号（昭和9年4月20日刊）の記事では、団員、日程・見学場所は決まっていたものの、団長、幹事とも未定となっており、団員の中に中谷・金両名が記されている。日付から見て、直前まで決まらなかったため、二人が幹事に移行したものと思われる。中谷は日本人、金は奈良女高師卒業で最優秀表彰も授与されているための人選であろうが、学事視察始まって以来初めての女性幹事であった。団長の北川も「さて出発の日が近づいた。突然自分に團長として出発せよとの事、こんな事であったら初めから之に関する事務だけでも自分でして置くのであったなどと悔んだり・・・団長としての決心、注意等々に頭をひねった」と記している（前掲『青霞翁劉柳原吉兵衛傳』、p.143）。
- 46 有松しづよ「朝鮮人女性教員による『内地視察』と李王家御慶事記念会」（『桃山学院年史紀要』第29号所収、2010年）、p.8
- 47 李前掲論文、p.158
- 48 前掲『櫻権の華』第2号、p.1
- 49 同上、p.1
- 50 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.145
- 51 同上、p.3
- 52 同上、p.145
- 53 同上、p.145
- 54 同上、p.143
- 55 前掲李論文、p.159
- 56 同上、p.159
- 57 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.144
- 58 同上、p.102
- 59 柳原は毎朝個人的に讚美歌を歌い、聖書を読み、祈祷してから仕事を始めていたが、その習慣を工具に呼びかけたところ、強制ではないにもかかわらず、全工具が集うようになり就業30分前に朝拝が行われるようになった。この集いから克己団が誕生し、数々の救済運動が開かれるようになったのである（同上、pp.40～41）
- 60 同上、p.47
- 61 同上、p.115
- 62 同上、pp.165～166

- 63 同上、pp.166～167
- 64 柳原は皇室、朝鮮王室に対する尊崇の念を持ち続け、文章にもその気持ちを多数記している。その言動は当時の聖公会も有していたものであり、佐治孝典は著書（『歴史を生きる教会—天皇制と日本聖公会』、神戸学生青年センター出版部刊、2003年）の中で、「戦中の天皇・天皇制を肯定し、協賛する資料は『基督教週報』をはじめ、各種の公文書、書簡などに残されているが、当時これに意義を唱え、疑問を呈する資料はほとんど見出されていない」（同上、p.1）と指摘し、柳原に関わる二人に言及している。一人は御慶事記念会幹事の元田作之進（聖公会東京教区初代主教で、初期の『基督教週報』発行編集人）であり、「良山」のペンネームで「君主の馬前に忠死することを知るものは、天の王の為に全身全霊を挺出することを知り易く、国家の為に一身を犠牲にすることを解するものは、亦天国の為に身命を<sup>なげう</sup>抛つことを解し易し。蓋し其主義に於いて同一なればなり」と書いている。佐治はこの文章を、「君主と天主、国家と天国が何の否定的媒介もなしにそのまま直結してしまっている」と批判している（同上、p.18）。もう一人は柳原の三男貞次郎（当時聖公会大阪教区主教）であり、『基督教週報』に「キリストの十字架の恵みを通して真に己に死に、神に生き、私に死に、公に生きる途を見出すのである。キリスト教が此の国家非常時において貢献する途もまったくここにある。…利己的な己を捨て国家社会の為に身を挺する奉公の真に生きる時である」（同上、pp.56～57）と書いている。佐治は「当時の天皇制国家の有様を正当にして、道義にかなったものと捉えており、…イエス・キリストの神と公、即ち国家との間には、何の否定的契機も介在する余地がなく、そのまま直結するものと信じているようである」と評している（同上、p.57）。柳原を支えた二人の言動には、柳原の主張と同様の思考傾向が窺える。三者とも上記のような批判を招く思想を持っていたばかりでなく、当時の聖公会自体も同様の思想を有していたのである。
- 65 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.119
- 66 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、p.141
- 67 同上、p.148
- 68 同上、p.140
- 69 視察記は半公的なものであり、皇室との接触到違和感を唱える文章を綴ることは難しく不可能に近い。しかし、朴宣美も「柳原に送った彼女らの手紙に限って言えば、皇室との接触到違和感を抱かず、光栄に浴するものとして認識し、少なくとも拒否・反発はしていなかったように思われる」と記している（朴前掲書、p.103）。
- 70 李王家御慶事記念会と朝鮮総督府学務局の関係については、前掲有松論文に言及されている。
- 71 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.148
- 72 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、pp.149～150
- 73 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.167。柳原は天皇の御下問に対し、「文化の発達した内地で教育して朝鮮に帰らせしめて内地のことを朝鮮人に理解せしむる点に於いて大いなる効果のございますことを多年の経験によって知ったのでございます」と応えている。
- 74 同上、p.179